

博士論文要旨

犯罪リスク・アセスメントの研究
非行少年用リスク・アセスメント・ツールの検討

東北大学文学研究科
人間科学専攻心理学専攻分野

森 丈弓

研究の背景、意義及び目的

犯罪リスク・アセスメントとは、犯罪の性質や個別の状況、犯罪者の態度、信念を評価し、それによって犯罪者が将来的に法律に沿った生活ができるよう援助するのに必要な介入のタイプを明確にすることであり、刑事司法施設の主たる活動となる犯罪者の処遇選択と社会的安全を確保しながら犯罪者の釈放を決定する上で重要な役割を演じる。

我が国では実証的な犯罪リスク・アセスメントの研究が欧米に比べて立ち遅れている現状があるので、今後の犯罪リスク・アセスメントに関する研究活動を活発化させ、犯罪者を取り扱う司法、行政システムの中に取り入れていくことが急務である。また、犯罪リスク・アセスメントについて実証的な根拠が得られるようになったとしても、それが直ちに現実世界の犯罪者処遇に反映されるわけではない。得られた知見を犯罪者処遇現場での実践に翻訳していくことが大きな課題となる。

こうした背景で本研究は科学的根拠に基づく犯罪リスク・アセスメントを行うことを目的として、我が国の非行少年について追跡調査を実施し、再犯リスクを分析し、検討を行ったものである。

再犯に関する実証的研究

Hoge & Andrews (2004)が開発した少年用サービス水準/ケースマネジメント目録(YLS/CMI)を我が国の実情に合うように邦訳し、少年鑑別所に入所した非行少年について、対象少年の非行の程度及び再犯リスクを正確に査定することが可能かどうかを検証することを目的に、以下の5つの課題を立て、2つの仮説を検証した。課題1として再犯リスクの高い者ほど家庭裁判所の審判では重い処分を受けているかどうか(仮説1)を検討した。課題2としてYLS/CMIにおいてより高いリスク群と判定された非行少年ほど再犯に及ぶ確率が高いかどうか(仮説2)を検討した。課題3としてYLS/CMI原版で設定された群分けよりも、より正確に再犯を予測できる群分けが可能かどうかを検討した。課題4として少年院処遇の効果があるかどうかを検討した。課題5としてYLS/CMIの8つの各領域得点が再犯に与える影響を検討した。

方法 調査対象者は少年鑑別所に観護措置で入所した男子少年389名(平均年齢16.9歳, $SD=1.5$)であった。本研究では再犯を対象少年が施設を退所して社会に戻って以降、少年鑑別所に再入所することと定義した。対象者が家庭裁判所の審判でどういった処分を受けたかについて調査した。

結果 少年鑑別所を退所し、再び事件を起こして少年鑑別所に入所してくる再入所率は.34であった。課題1では、社会内処遇である保護観察よりも施設内処遇である少年院送致の合計得点が高いことが示され、仮説1は支持された。課題2では低リスク群は時間が経過しても再犯をしなかった者の割合が他の群

に比べて減少しにくいことが示された。より高いリスク群に属する非行少年ほど再犯に及ぶ確率が高まるという仮説 2 は検証された。課題 3 では、決定木による分析を実施して対象者の群分けを行ったところ、再犯率の異なる 4 つの群が抽出された。これら 4 リスク群の生存関数は有意に異なることが確認された。課題 4 では合計得点によって対象者をリスクの違いによって群分けし、それぞれの群内で少年処遇を受けた少年とそうでない少年を比較したところ、中リスク群においてのみ、少年院送致群の方が社会内処遇群よりも有意に再犯率が低下していた。課題 5 では、4.仲間関係、5.物質乱用、6.余暇・娯楽、7.人格・行動、8.態度・志向の 5 領域は単独では再犯に有意な影響を与えていないことが示され、この結果は動的リスク要因のみを分析に投入した場合でも変わらなかった。

考察 本研究では再犯リスクが家庭裁判所の審判決定において重要な要因になっていることが明らかになった。これは、少年審判において犯罪者の社会的危険性の評価が考慮されていることを示している。また、YLS/CMI を用いることで再犯を統計的な根拠を持って予測することができることが示された。

YLS/CMI を少年審判における査定に用いることによって、実証的な根拠をもった再犯リスクの査定を行うことが可能となるであろう。特に、課題 3 の分析によって日本の非行少年により対応した閾値を得ることができた。この閾値を用いることで、少年審判に携わる専門家は YLS/CMI 合計得点を元に、自分が担当する非行少年がどの程度の再犯リスクを有しているかを容易に判断することが可能となる。

少年院処遇については、中リスク群においては社会内処遇を行うよりも少年院で処遇を行ったほうがより再犯を抑止する効果が実際にあったと結論できる。高リスク群については、現代の処遇では更生困難な犯罪者がいることが示され、こうした対象者に焦点を当てた処遇の開発が我が国の刑事政策の今後の重要な課題の一つとなると考えられる。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	森 丈弓
論文審査担当者	(主査) 教授 大渕 憲一 教授 行場 次朗 教授 阿部 恒之 教授 佐藤 嘉倫 准教授 坂井 信之 准教授 辻本 昌弘
論 文 名	犯罪リスク・アセスメントの研究 非行少年用リスク・アセスメント・ツールの検討
<p>将来の犯罪を予防し、また犯罪者更生を支援するためには、個々の犯罪者の再犯可能性を査定し、また、それがどのような要因によって規定されているかを明らかにする必要がある。しかし日本においては科学的な犯罪リスク・アセスメントの研究は未発達であった。犯罪の一時的増加に伴って人々の犯罪不安が高まった 2000 年頃からようやく、日本の司法機関において犯罪リスク・アセスメントの研究が本格的に開始された。論者は、それ以前から犯罪リスク・アセスメントの研究を続けていたが、司法機関の研究チームにも抜擢され、大規模な再犯研究に従事している。本論文は論者自身が独自に収集したデータを用いて、犯罪リスク・アセスメントの原理を理論的・実証的に明らかにし、また、これを日本において実用化するためのツール開発を試みたものである。</p> <p>犯罪リスク・アセスメントとは、犯罪者個人の生育史、性格、態度・信念、過去の問題行動、犯罪行為、発生状況等の特徴に関する情報を収集し、統計的手法を用いて再犯可能性を査定するものである。そのツールとして論者は、カナダの Hoge & Andrews (2004) が開発した少年用サービス水準/ケースマネジメント目録 (YLS/CMI) を邦訳し日本の実情に合うように改訂した。これを用いて少年鑑別所に入所した男子少年 389 名の再犯リスクを査定した上で、彼らが矯正施設を退所したのち最長 4 年間追跡して、再犯発生の有無を調べ、以下の 5 課題に沿って解析を行った：(1) 再犯リスクの高い者ほど家庭裁判所審判で重い処分を受けているかどうか、(2) YLS/CMI で高リスクと判定された非行少年ほど再犯に及ぶ確率が高いかどうか、(3) YLS/CMI 原版で設定されたリスクの群分けよりも精度の高い再犯予測を可能にする群分けが可能かどうか、(4) 少年院処遇に更生効果があるかどうか、(5) YLS/CMI の 8 領域得点は再犯にどのような影響を与えるか。</p> <p>対象少年たちが矯正施設を退所したのち再び事件を起こして少年鑑別所に再入所した割合は 34% であった。5 課題に関して次の知見が得られた。(1) 施設内処遇の少年院送致となった少年は社会内処遇である保護観察の少年よりもリスク得点が高かった。(2) 高リスク群の再犯率は他の群よりも高く、施設退所後早期に再犯していた。(3) 決定木分析による新たな群分けは Hoge & Andrews の群分けよりも精度の高い再犯予測をもたらした。(4) 中リスク群においてのみだが、少年院送致された少年は社会内処遇された少年よりも再犯率が低く、矯正処遇効果が見られた。(5) YLS/CMI の 8 領域の中で、非行歴、家庭・養育状況、教育・雇用 が特に再犯と強く結びついていることが確認されたが、他の領域もツール全体の予測力向上には寄与していた。</p> <p>本論文は、非行少年の追跡研究によって YLS/CMI の再犯リスク予測に実証的妥当性をもたらし、また、日本の非行少年により対応した群分けを見出したが、逸脱継続要因と更生処遇効果をも明らかにした本論文の成果は、犯罪心理学分野の発展に大きく寄与するものであるとともに、我が国の司法矯正施策に対しても重要な貢献となるものである。よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を持つものと判断される。</p>	